

## 国際教養学部

### 1. 「学習成果の可視化」に向けた取り組み

#### (1) 現状の説明

##### 1. 「英語力」の可視化

本学部では英語で学部専門科目を提供しており、入学時から英語能力の集中的な早期養成をおこなっている。現行のカリキュラムでは3年生の必修科目である演習の履修要件として TOEFLiBT80 以上の取得が設定されており、基準を満たさない学生は卒業ができなくなっている。そのため入学時の英語プレースメントテストの結果を基にしたクラス分けを行い、1年次後期からの留学前、留学中、帰国時に TOEFLiBT の受験をし、英語力の学習成果の可視化を行ってきた。また e ラーニングプラットフォームである Moodle を活用することにより、随時学生ひとりひとり英語力の把握、学習時間のモニタリングと、その対応が可能となっている。

##### 2. 「異文化理解力」の可視化

留学前の1年次前期に提供している必修科目 Cross Cultural Understanding (CCU)、2セメスターの留学期間、2年次後期に取得する Academic Writing I の講義をつうじて、「異文化理解力とグローバルアウェアネスに関する調査」と題して①異文化理解力とコミュニケーション能力、②グローバル意識と平和と繁栄に寄与する意識に関し、3つのレベルのルーブリックを作成し、学習成果の可視化に取り組んできた。現在中間レポートを作成中。

##### 3. International Fieldwork (春季短期研修)での「社会人基礎力」の可視化

2年次春季休業中に希望者を対象に行っている International Fieldwork では研修先である複合社会マレーシアが抱える課題に焦点をあて、小グループで提案型の研究報告を義務づけている。学習成果の可視化のため経済産業省が作成した「社会人基礎力」の項目を活用し、事前・事後の成果を可視化ができるようにしてきた。

#### (2) 点検・評価

##### 1) 効果が上がっている事項

##### 1・英語力の養成

3年次前の段階で TOEFLiBT80 以上の基準を満たすことが義務付けられていることが、学生の英語力養成の強い動機づけになっている。2014年度に入学した学部生 77 名のうち 62 名が基準を満たしている。

##### 2) 改善すべき事項

学部教育が英語で行われているため、英語の学習成果の可視化が重要視されており、学生の関心も英語に特化しがちであるが、カリキュラムポリシーに沿った形で以下の分野での学習成果の可視化が必要とされる。

##### 1・数的能力、論理的思考能力の可視化

すでに Moodle を用いた SPI 対策の数的処理能力は可視化可能である。しかし、より進んだ数的処理能力や論理的思考能力をどう測るかについては、検討が必要である。

##### 2・「書く力」の学習成果の可視化

**(3) 将来に向けた発展方策 ※上記(2)点検・評価と関連して記載してください**

**1) 効果が上がっている事項**

1・英語力の養成

eラーニングプラットフォームである Moodle を活用し、随時学生ひとりひとり英語力の把握と、その対応をおこなっていく。

**2) 改善すべき事項**

1・数的能力の可視化

Introductory Statistics 等の数的処理に関する必修科目のなかで、CAOS 等を活用して、学習成果の可視化ができる仕組みを作っていく必要がある。

2・「書く力」の学習成果の可視化

「書く力」の養成は学部専門科目、演習等をつうじて行っているが、今後はジュニアペーパーの導入、卒業論文の作成を通じて書く力の学習成果が、客観的に可視化できる仕組みをつくる。